

## 随想

### 1 私と読書

私はどんなに忙しくても、毎週一度や二度は最寄りの本屋に立寄ることとしておる。そしてたいていの場合、二、三冊の新刊書を求めて帰ることにしておる。本屋の書架で私の足を止めさせるところは、政治、経済、法律等とかがいてあるところというよりは、むしろ歴史、社会、随筆等の書架である。そこに毎週、新たに持込まれる新刊書の新鮮な香りと、それを手にした柔かい触覚は、たまたまなくうれいものである。生きる悦びを味わうことができる瞬間である。

せっかく求めた本は読まなければもったいない。また読むためにこそ求めたものである。ところが実際には、読書に割愛する時間が十分でないばかりか、頭が散文的になっていて根気もまた

十分ではない。まず一わたり目次を見渡して、そのうち興味を惹く節を読んでみる。順序を追わないで読んでいううちに全部読了する本もあるし、一節だけで止めてしまう本もある。もちろん日本人のものした本もあれば、訳本（それも多くは欧米人のもの）もある。どちらかといえば訳本の方が多いかもしれない。

日本人の本よりは、どうしたものか、訳本の方が読み応えのする本が多いように思う。構想の壮大さ、方法論の雄渾さ、引例の豊富さ、筆致の勢い等において、西欧物の方がすぐれておるものが多いように思われてならない。そしてそれは、欧米人が自ら築きあげた欧米文化に誇りと自信とをもっているせいではないかと考えられる。支那の古典も、欧米のそれとは全く異質のものではあるが、それ自体われわれの肺腑をうつ力をもっておる。そこには欧米人の思想の紹介もなければ受売りもない。支那人固有の思想が大胆に吐露されて、迫真の魅力をもっておる。それらに比して日本人のものには、この東西両文明の流れのいずれかに沿って、よくいえばその忠実な紹介、悪くいえばその模倣という域を、未だ十分には抜け出ていない怨みがある。つまりみずから文化に対する誇りと自信に乏しいからである。そのいずれにも決めきれず、ユニークなみずからの姿も発見しきれず、東西の間を無闇に彷徨しつつ考いてゆきつつあるのが、多くの日本人の姿ではないかということである。

古老の語るところによれば、明治維新のあり、日本には大学北校と大学南校があったそうだ。北校は四書五経を軸とした修身齊家治国の学問を主として教え、南校は西洋の学問を輸入してこれを教えこむことを主たる任務としておつた。ところが明治政府は、この南校を学問のメツカにするという重大な選択を行なつて、それが今の東京大学になつたということである。かくて近代日本の学問の重心は、洋学におかれることになつた。そしてそのことは、日本の近代化にそれなりの大きい貢献をしてきたことは疑いを容れない事実である。ところがこの洋学偏重ということが、日本の物質的近代化の面では多彩な花を咲かせたが、その根底にある西洋思想の本体が、どこまで日本人の血肉となり、その実生活を嚮導するのに役立つておるかということになると、まことに心細い感じを脱しきれない、というのが偏らない今日の告白ではなからうか。

もちろん、明治、大正、昭和にかけての日本の近代化過程の裏にあつても、支那思想の研究はたゆみなくつづけられ、その学燈が消えていたわけではない。否、むしろわれわれの现实生活を規律する思想的公準の多くのものは、この支那思想に源流をもつていたことは否めない。それにしても、この二つの大きい思想的潮流の渦中に投げこまれて、右往左往してきた日本であつた。そのことは戦後においても変りがないばかりか、戦後における日本の特異な精神情況は、その平和回復の過程との関連において、より多く西洋思想の側に揺れ動いてきたともいえよう。

ところがわれわれ日本人の精神の渴きは、こういう過程を通していつこつに癒されることもなく、みずからの思想と生活の投錨点をどこに見出すべきかも決めきれず、依然として彷徨と苦悶を重ねておる有様である。真に日本的なもの、われわれが誇りと自信をもち得る固有な日本思想は、いったい何かという課題は、政治においても、経済においても、さらにはより深く文化の世界においても、発掘され確立されていない現況である。この苦悶は日本人に根深い焦躁心をかき立てていると見えて、日本ほど刊行物の多い国はない。新刊書籍は正に汗牛充棟、応接にいとまがないほどである。自然、日本人は乱刊乱売乱読となる。その後に沈溺するものは、大いなる誇りでもなければ自信でもなくまた満足でもない。空ろな精神の渴きだけが、いつまでも残るといふ始末である。

そこで私が、近来切実に考えておることは、乱読をまず慎もうてはないか、ということである。洋の東西を問わず、歴史の風雪に耐えて、しかも依然強い光彩と生命力を放つ少数の書籍を、自分の実生活の伴侶として、よく読みよく消化し、よく実践するという生き方をとらない限り、われわれの精神の渴きは癒すべくもないのではなからうか。「字は書くのではなく彫るものだ」と道破した哲人があった。読書には狭いが、歴史や時世の理解と物事の決断に誤らない人がいるものだ。われわれは書架に積まれた書籍の数の多きを誇るべきではない。みずからの実生活に不動

の自信と光明をもたらす、珠玉のような数冊の書がほしいものである。一日書庫に入り、玉書を  
得て寝食を忘れ、かつ読みかつ写すほどの値うちのある本がほしいものである。読書の効用は文  
章の彫琢練磨にあるのではなく、みずからの生活実践の光明を見出すものであるからである。

そうした苦吟を通して、日本人みずからの生活にとけ込み、これを規律し、これを鼓舞する思  
想は、その源流が洋の東西いずれであろうとも、日本人の血となり、やがてそれが成長して、日  
本人みずからの壮大な思想と生活と文化を生む契機になるのではなからうか。近時少閑を得て、  
私はこのようなことを考えておる。